

動き出した

広域行政

まず広域行政センターが開所

斎場も今年度着工へ

日光市・今市市・藤原町・足尾町・栗山村の、二市二町一村で構成されている「日光地区広域行政推進協議会」は、昨年三月、広域市町村圏計画を策定して以来、計画の具体化を進めてきましたが、このほど、その事業のひとつである「広域行政センター」が完成、七月二十四日に、関係者を招いて竣工式が行なわれました。

また、七月十日に開かれた協議会では、斎場の建設敷地が決まるなど、広域圏行政がいよいよ本格的に動きだしました。

そこで、今月号の広報特集は、これらの話題を中心に、広域圏行政の目的と、その基本的構想などを取り上げました。

日常生活圏に即応した行政を

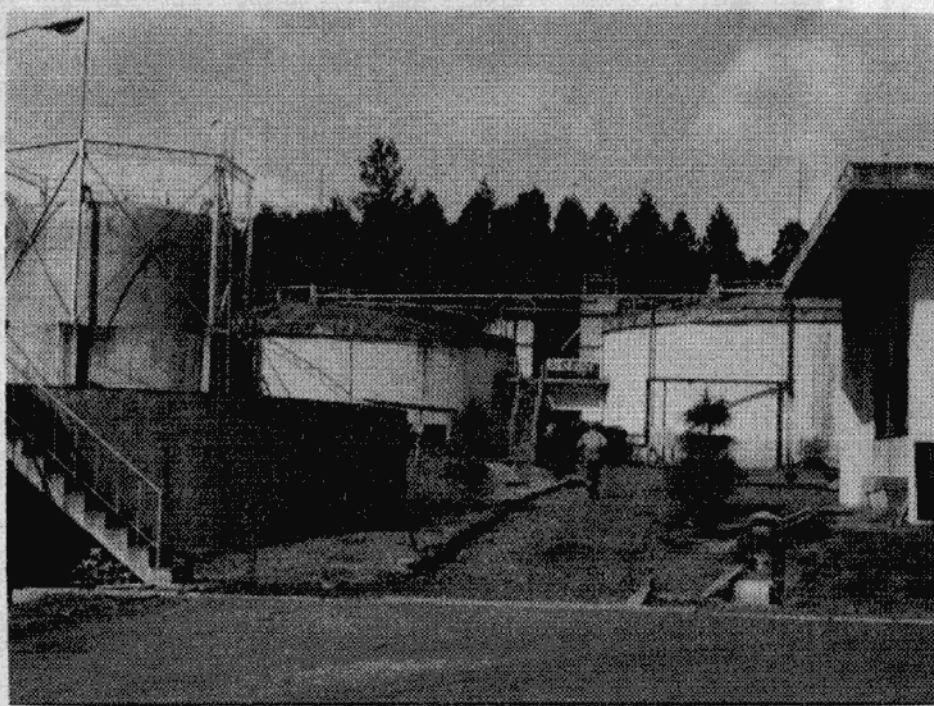
広域行政の目的

経済の発展に伴い、住民の生活水準は急速に上昇し、特に交通、通信手段の発達には、私たち

の日常生活の行動半径をますます広げ、本市から今市、宇都宮はもちろん、東京まで通勤圏に含まれるほどになっています。

こうした中で、いわゆる人口の過疎・過密化の進行も、依然として衰えをみせず、経済の発展に比べ、著しく立ち遅れている公共施設の整備は、一市町村の施策のみでは、とうてい住民の要請にこたえることができない現状にあります。

そこで、ひとつの市町村が限られた財源の中で、小規模の施設をそれぞれ作るよりは、住民の日常生活圏にはいる、いくつかの市町村が共同して、ひとつの大規模な施設を建設する方が、経済面でも、また利用のうえで



昭和37年から2市1町1村共同で実施している「日光地区し尿処理場」

ら、圏域全体から見た計画を策定し、市町村道の整備についても、隣りの市町村とのつながりを考え、お互いに協議しあうて進めるなどの必要があり、このため、昭和四十五年七月十七日

首都圏観光の中心地に

日光地区圏域の発展方向

現在、既に国際的観光都市である本市と、温泉地として発展している鬼怒川・川治をもつ日光地区広域圏は、隣接する塩原那須とともに広域観光圏を形成して、今後、東北縦貫自動車道の開通などにより、飛躍的に増大すると思われる、首都圏の観

光、レクリエーション需用を受け入れる役割を、必然的に担わなければならない。

圏域の約半分の面積は、日光国立公園で占めていますが、圏域内の各市町村は、「観光、レクリエーション地域としての開発」を、共通の目標としながらも、それぞれの立地条件などの特性に応じた方向で開発を図り、しかも、圏域全体の一体化を達成しなければなりません。

日光市の

果たすべき役割

本市は、この圏域を代表する国際的観光都市ですが、東北縦貫自動車道や、すでに七里インターの位置も公表された、日光宇都宮間有料道路の完成、県外県内の隣接観光圏との周回ルート建設などに、モーターリゼーションの激化も加わって、自然と人工美を兼ね備えた、一大観光拠点としての役割を持つこと

〔次のページへ続く〕